

戦争史記述の社会学的規準

野上 元（筑波大学）

研究者としてスタートした 1990 年代半ば以来、戦時期社会の描写を試み、戦時動員に関する先行研究を再考し、戦争体験者に聞き取り調査を行い、戦争やその集合的記憶に関する言説や表象を幅広く分析してきた。

今回、シンポジウムが組まれるほどになった「社会学による戦争の探究」だが、まことに不安でならない。この不安に本報告の出発点がある。もちろんそれは、上記のような自分自身のこれまでの研究を批判し、乗り越えようとするところでもある。

自分自身の研究も含め、日本の社会学で「戦争」というとき、数少ない例外を除き殆どすべて 1945 年 8 月に終わった「アジア太平洋戦争」が対象として暗黙のうちに前提されている。（しかも近年では特にその末期の「空襲」「特攻」「沖縄戦」「原爆」の「記憶」に関心が集中しているように思う）

アジア太平洋戦争の経験が、日本の社会学のみならず、すべての人文社会科学にとって取り組むべき重大な対象であったことは間違いない。もちろん今後もそうだろう。なぜあの戦争を止められなかったのか、戦争を繰り返さないためには何をしなければならないのか、という問いの重要性は変わらない。けれども一方で、近年の情況論的なことを交えて言えば、アジア太平洋戦争の結果が社会のあり方を強く規定した時代（＝「戦後」）は、やはり終わりつつある。戦争や軍事をめぐる危険な情況に新たに足を踏み入れつつあるというとき、そうした情況を把握したり整理したり批判するために、社会学に今後、何ができるだろうか。戦争はもはや総力戦の時代ではなく、議会や世論が目を光らせる、大規模な公共事業のようなものになっている。

本報告では、社会学で戦争を考察の対象とするというときに求められる方法的な諸規準のうち、歴史的なそれについて検討したい。つまり、（純粹に軍事的な研究や）歴史学の領域としての軍事史や戦争史とは違う、社会学独自の戦争史の記述（＝整理された理解）とはどのようにして可能か、そしてそうした規準を定めることは、どのような意味で必要とされているのかということについての検討である。

そのために本報告では、戦争の探究に歴史的な参照を試みるときに必要な理念型をいくつか提示することにしたい。その理念型は、各時代における「現代社会論／社会理論」として蓄積されてきた社会記述それぞれのスタイルと、同時代の戦争を対応させることで得られる。前者の系列には、市民社会論、大衆社会論、消費社会論、情報社会論が想定され、後者の系列としては、18-19 世紀の諸国民の戦争、20 世紀前半の総力戦（二つの世界大戦）、20 世紀後半の冷戦、20 世紀末から現在にかけての「新しい戦争」が想定されている。

野上（2013）では、このうち社会記述の形式としての消費社会論と冷戦の関係が検討され、また野上（2015：印刷中）では、市民社会論と 18-19 世紀の戦争の関係が検討された。その際に採られた方法は、単にそれぞれの戦争を社会史的に把握してゆくということだけでなく、それぞれの社会記述を、軍事的・戦争論的な視点から読解することであった。

例えば、ボードリヤールの一連の消費社会論は、冷戦論としても読める。——というよりも、冷戦論として読まなければその主張の核心部分を取りこぼす。また、17-18 世紀の社会契約論において、「戦争状態（万人の万人に対する闘争）」や「隷属」をめぐる考察が、理論的にかなり基

礎の部分で行われていることを考えれば、市民社会を構想する社会理論（市民社会論）は、ある種の戦争論としての読解を許すだろう。消費社会論や市民社会論を「戦争論」として読む試みがこれまで十分になされてきたとはいいがたい。

残りの二つの社会記述（大衆社会論・情報社会論）も併せて、直近 3 世紀ほどの戦争を、戦争史記述のための 4 つの理念型として提示することができる。

戦争		象徴的なメディア	個別性・集合性
市民社会論	市民/国民の戦争	啓蒙のメディア (出版・新聞)	近代的個人・社会契約
大衆社会論	総力戦	扇動のメディア (映画・ラジオ)	群集・民族
消費社会論	冷戦	誘惑のメディア (テレビ・広告)	消費者・視聴者
情報社会論	「新しい戦争」	再帰するメディア (PC・インターネット)	ID(アカウント)

そのことによって、少なくとも次の二つのことが言えるはずである。

1. 第一次大戦に続く二つ目の世界大戦の重要な部分をなす、総力戦としてのアジア太平洋戦争の普遍性と特殊性を、社会理論と関連づけて理解することができる。この戦争に関するこれまでの膨大な蓄積を、他の時代や場所の戦争に対する考察と有機的に対比させることができる。
2. いまやすっかり忘れられた戦争のようにもみえる「冷戦」について、社会学的な検討を加えることが出来る。今年「終戦・敗戦」70 年だったということだが、むしろ今年は、冷戦が終わっての「冷戦後」25 年という時代でもある。これをアジア太平洋戦争に当てはめれば、1970 年の頃にあたり、「戦後」を見直す一つの契機となった時代である。であれば報告者は、「冷戦体験の風化」「冷戦の記憶の継承と断絶」こそ、むしろ問題にしたい。「冷戦」は、どのような意味で「戦争」と呼べるのか。冷戦の「生存者（体験者）」として、考えてみたいことは少なくない。

社会学という学問は様々な隣接領域を持っているが、報告者にとってのそれは、歴史学である。「戦争を社会学の探究の対象とする」というときに、社会学は戦争に関するどのような歴史認識を持っているだろうか。研究対象にのみ没入するだけでなく、比較の視点や時系列的な追跡を組み合わせて対象を相対化し、「その探究の意味」自体を常に問い直すのが社会学だと考える。「戦争史記述の社会学的規準」は、そのために求められる。

参考文献

野上 元「市民社会の論理と諸国民の戦争」内田隆三編『現代社会と人間への問い』せりか書房、2015 年（印刷中）

野上 元「消費社会の記述の冷戦の修辞」福間良明・野上元・蘭信三・石原俊『戦争社会学の構想－制度・体験・メディア』勉誠出版、2013 年

野上 元『戦争体験の社会学－「兵士」という文体』弘文堂、2006 年